Report

調査報告

マレーシア・ペナン島における チベット仏教寺院の展開 ：二〇一八年九月調査

名古屋市立大学大学院人間文化研究科　榎木　美樹

一・調査の目的

国境を越えて人・モノ・カネが移動するグローバル化が進行する今日的状況において、他国での国内避難民あるいは難民化の影響は周辺国や受入国に深刻な影響を及ぼす(1)。避難民・難民の生存確保が第一義たる緊急支援の次の段階として、彼らの生活再建への支援がある。受入国への負担を最小限に留めるためには、避難民・難民の自立を念頭に、彼らの経済基盤の安定と文化の継承を目指すコミュニティ再建が肝要である。常居所を追われた人びとの流出先での自立的生活再建の延長上に受入国住民との平和的共存社会の構築が可能となる。

国家主権、国連の機能、人権といった問題群が絡んでなお、現在においても解決されていない国際問題の一つにチベット問題があるが、現在、世界には一二万人の亡命チベット人がいる。各地の亡命チベット人は受入国内で集住し、経済活動を安定化させると同時に、チベットの文化を紐帯とするコミュニティの形成・維持・再生産をする場を形成している。文化的紐帯を保持しつつ定住地（旧難民キャンプ）を基盤とした自立的経済活動を推進する亡命チベット人は「難民界の優等生」（田中二〇〇二）と称されてきた。インドは最大のチベット難民受入国として文化・社会・政治的役割を担ってきた。一〇万の亡命チベット人が暮らすインド国内には、三九ほどそうした亡命チベット人の定住地があるといわれている。近年は、世界に拡散するチベット人同士のネットワークを活用して、定住地を経由した第三国への再定住や外国への出稼ぎ・移住も増えている。一九五九年の最初の難民流入以来、四半世紀以上が経過している現在、亡命チベット人の移住ネットワークにどのような変化が起きているのかを、より豊かな生活を求めるという「生計戦略」の観点から解明する作業が重要な研究課題になる。

こうした観点から、筆者は、現在、三菱財団人文科学研究助成「亡命チベット人コミュニティの変遷と生計戦略としての移住ネットワークの今日的展開」（二〇一七年～二〇一九年度）に取り組んでいる。二〇一八年度は、亡命チベット人の移住先の一つとして最近注目を集めるマレーシアでの調査を実施し、新規で流入するチベット人およびチベット仏教関係者と在来の仏教徒コミュニティや近隣居住者との関係性について知見を得、移住の足がかりを形成しつつある過程と基礎的情報を把握することができた。ここでは調査の概要をチベット仏教寺院の展開にしぼって記述する。

二・調査の概要

調査は二〇一八年九月一七日～二四日に、調査地をペナン島に選定して実施した(2)。

マレーシアは、マレー系・中国系・インド系、そして多数の部族に分けられる先住民族で構成される人口約

三、〇〇〇万人の多民族国家である［マレーシア政府観光局ウェブサイト］。マレーシアでは、仏教はイスラム教に次いで二番目に多く信仰されている。二〇一〇年のセンサスでは国教であるイスラム教を信仰する人々の割合は六一・三％で、その次が仏教で一九・八％を占める［マレーシア政府統計局ウェブサイト］。仏教信者のエスニック構成は一九八〇年以来基本的に同じと考えられており、華人が全体の九八％、残り二％弱はタイ、ミャンマー、スリランカ系信者から成っている［黄二〇一〇：二五二］。

図１　マレーシア地図

マレーシア統計局の二〇一〇年センサスによれば、ペナン州の人口は一七〇万人、ペナン島の人口は七〇万人程度で、そのうちジョージタウンは三〇万人、住民には華人の割合が高く、次いでマレー系、インド系タミル人が多い。イスラム教、仏教（大乗仏教・上座部仏教など）、道教、ヒンドゥー教、カトリック、英国国教会、シーク教など、きわめて多様な宗教施設が集中している。ペナン島北東部アイルイタムの丘上には、マレーシア最大の仏教寺院たる極楽寺[3]がある。このような土地柄を活用し、亡命チベット人のチベット仏教徒も活動拠点を築いている。

図２　ペナン州地図

写真１　極楽寺仏塔

写真２　極楽寺境内の様子１

写真３　極楽寺境内の様子２（売店付近）

二-一．ペナン・サキャ仏教協会

チベット仏教サキャ派系寺院で、幹事長を務めるL氏（中華系マレーシア人）へのインタビューによると、当該協会は、主として中華系マレーシア人を中心に二〇一一年ごろに設立されたが、信者数や資金規模を勘案して、まだ寺院を建設せず、建物の一室を修練会場として教義習得を優先して活動している。折に触れ、インドやネパールからチベット人高僧が来訪し説法するなどして、教義理解を深めている。日常は、習熟度の高い人に先導役を務めてもらって、各人が自らの学習を深めている。

二-二．カダンパ仏教文化寺院

ユネスコ世界文化遺産バッファー・ゾーンの商業区内に立地するチベット仏教ゲルク派系寺院で、一〇年ほど前に現在の地に設立された。寺院の責任者である門主は台湾人で、台湾、クアラルンプール（マレーシア首都）およびイポー（首都クアラルンプールから北西に二〇〇km）を主な拠点として活動してきたが、ペナン島にカダンパ寺院を建設してからは、ペナン島ジョージタウンが観光地ということもあり、重点活動拠点になっている。信者は地元の華人が多く、当該寺院が主催する祭祀が開催される際には数百人規模で人々が集まるという。門主である僧侶が台湾人であるからその影響か、当該寺院の教義がそうであるのか、神秘主義的な要素を強く持つ展示物と書籍が多数あった。

写真4　カダンパ仏教文化寺院の立地

写真5　寺院入口付近の装飾

二-三．サムエ・ドドゥル・リン僧院

ペナン国際空港に隣接するエリアに立地する二〇一七年に建設されたチベット仏教ニンマ派系の寺院で、責任者の門主は、ネパールに長らく居住していた亡命チベット人である。当該寺院以外にも、アメリカ、台湾、マレーシア（主に首都クアラルンプール）にも拠点があり、数か月ごとに各拠点を移動しながら布教活動をしている。門主が不在の間は、同じくネパール在住であった二名の亡命チベット人僧侶に管理・運営を任せて、日々の勤行や仏教行事を執り行っている。日々の勤行は朝夕実施されるが、一〇～三〇名の信者が参加し、火曜日と土曜日の特別勤行および満月にちなんだ仏教行事がある時には数十人規模の信者が集結する由。寺院の立地する土地は、マレー華人のビジネスマンが寄進した。信者の多くも中華系マレーシア人である。

写真6　外観（入り口）

写真７　マニ車

写真８　境内の様子

写真９　仏塔

二－四．ペナン島における　チベット仏教寺院の展開

上記三つの寺院いずれもが、ペナン島進出に先立って、台湾での活動経験を有し、活動の拡大に伴って、マレーシアの首都であるクアラルンプールもしくはペラ州の州都イポーがマレーシアにおける最初の拠点となっている。ペナン島は、マレーシア第二の拠点的な意味あいで建てられていた。僧侶は、カダンパを除いて亡命チベット人の僧侶が責任者で、現地への布教活動のほか、既に東南アジアに築いている拠点への巡回指導を行っている。

ペナン島は華人が多く、比較的治安状況が良いことに加え、生活面での住みやすさから外国人の居住者および観光客が多い土地柄である。ユネスコ遺産登録以後（二〇〇八年）、観光客を見込んだ土産物屋も多数進出し、ストリート・アートなど、土地の魅力を生かした観光アピールにも熱心な土地柄であるため、外国人が、存分に知的好奇心を発揮し安全に調査・就学が出来る環境が整っている。このような土地柄を活かし、中国語を活用して生活・活動できる点が、チベット寺院の活動の基礎になっている。

今回の調査では、チベット仏教の四大派のうち三つの寺院・施設を確認し、その運営に関わる人びとへのインタビューを行い、観光地化がすすむペナン島におけるチベット仏教寺院の展開については有益な情報を集めることができた。チベット人僧侶や中華系マレーシア人の在家信者や関係者から話を聞けた半面、生活の場としてマレーシアを選択した亡命チベット人には面会することができなかった。寺院関係者の話では、そのような亡命チベット人も在住しているということなので、一般の亡命チベット人のネットワークについては向後の課題としたい。今後も継続して、亡国の民である亡命チベット人の移動の質や内容がどのように変化しているのか明らかにし、彼らの実践するしなやかな生計戦略および平和的共存社会の構築の方途に迫ることで、経済基盤の安定と文化の継承を目指すコミュニティ再建の在り方を模索するモデル提示の試みを探っていく。

［注］

(1) 難民と避難民の違いは、国境を越えたか否かという点だが、難民と国内避難民の苦境は同質であることが多く、共通の支援対策を執ることが最も現実的である［ＵＮＨＣＲ協会ウェブサイト］。

(2) 三菱財団人文科学研究助成［亡命チベッ

ト人コミュニティの変遷と生計戦略としての移住ネットワークの今日的展開」は二〇一七年一〇月から実施しているが、難民化して流出したチベット人の第一庇護国として機能しているインドに設置された定住地におけるコミュニティ形成の変遷および生活基盤の安定化に関しても調査している。インド内の定住地で調査をする課程において、近年はインドやネパールを経由してマレーシア、とくに世界遺産に登録されたジョージタウンを擁し急速に観光地化が進むペナン島への進出が活発化する動きがあると聞き及び、今回の調査地を選定することとなった。

(3) 極楽寺（現地名はKek Lok Si）は一八九一年に設立された客家系華人が資金を提供して建築された仏教寺院である。広大な境内には、金色の仏像や巨大な観音像が立ち並び、さながらテーマパークのようである。高さ三〇ｍの七層からなる仏塔が有名。下層部が中国、中層部がタイ、上層部がビルマの様式と、三つの建築様式の混在した珍しい仏塔で、内部には一万体の仏像がはめ込まれている。

[参考文献]
田中公明、二〇〇二、「チベット」、梁石日ほか『アジア新世紀第三巻 アイデンティティ：解体と再構成』岩波書店。
黄蘊（二〇一〇）「マレーシアにおける上座仏教展開のマルチ・エスニック性とコミュニティ形成」『文化交渉による変容の諸相』（次世代国際学術フォーラムシリーズ）Vol.2、東西学術研究所、pp.249-269（http://hdl.handle.net/10112/3368より入手）

参考ウェブサイト（二〇一九年一月一五日閲覧）
・国連ＵＮＣＨＲ協会
https://www.japanforunhcr.org/lp/refugees?utm_source=google&utm_medium=cpc&utm_campaign=JA_JA_UNHCR_Brand_refugees&gclid=CjwKCAjwpeXeBRA6EiwAyoJPKrxtgfjSlF3o1V0yKy6xzOnUjTP9a5mpy_oI4JUCRKIEAI3APnBAPxoCtpcQAvD_BwE
・マレーシア政府観光局
http://www.tourismmalaysia.or.jp/region/penang/index.html
・マレーシア統計局（Department of Statistics, Malaysia, Official Portal）
https://www.dosm.gov.my/v1/index.php?r=column/ctheme&menu_id=L0pheU43NWJwRWVSZklWdzQ4TlhUUT09&bul_id=MDMxdHZjWTk1SjFzTzNkRXYzcVZjdz09